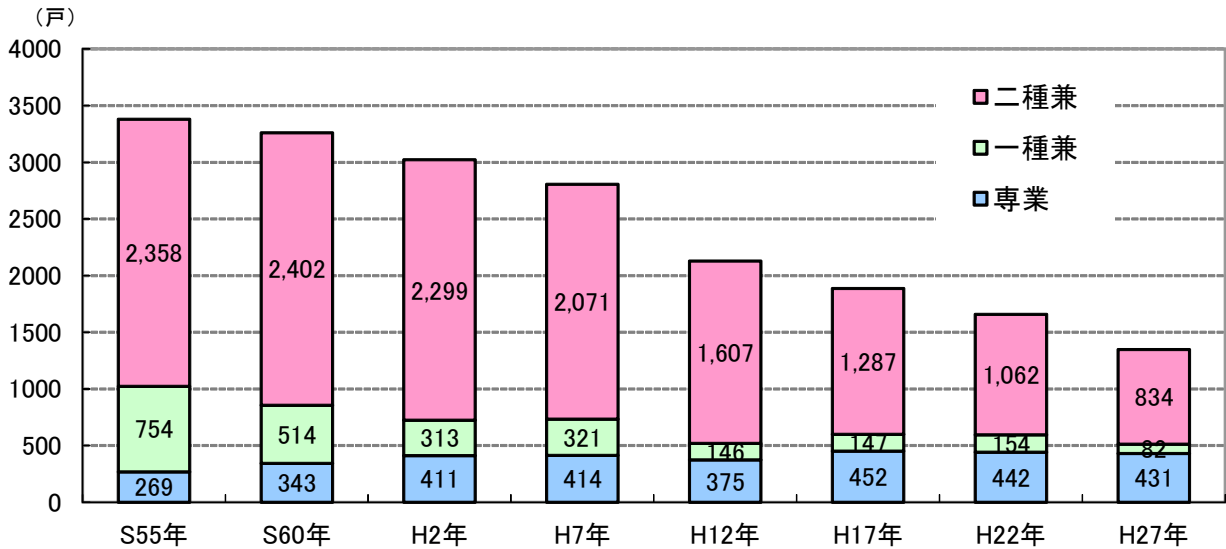


3 農業の現状と取組

(1) 農業の就業構造

○農家戸数は年々大きく減少しており、ここ20年で半減している。

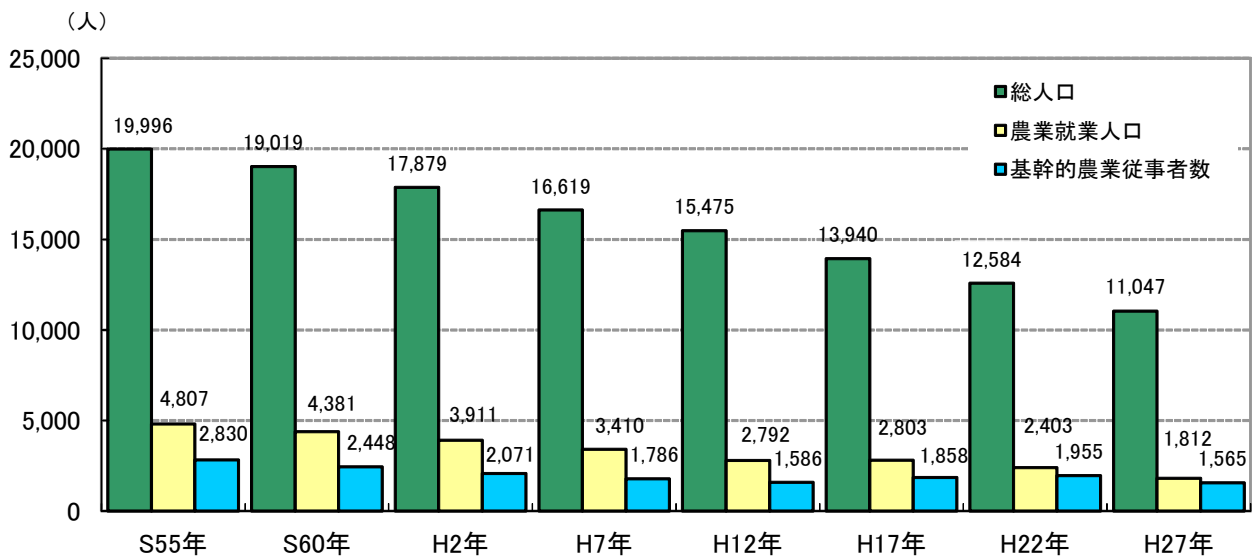
日野郡専業兼業別農家戸数の推移



出展：農林業センサス（2015）

《参考》

日野郡の総人口、農業就業人口、基幹的農業従事者数の推移



出展：農林業センサス（2015）及び鳥取県勢要覧

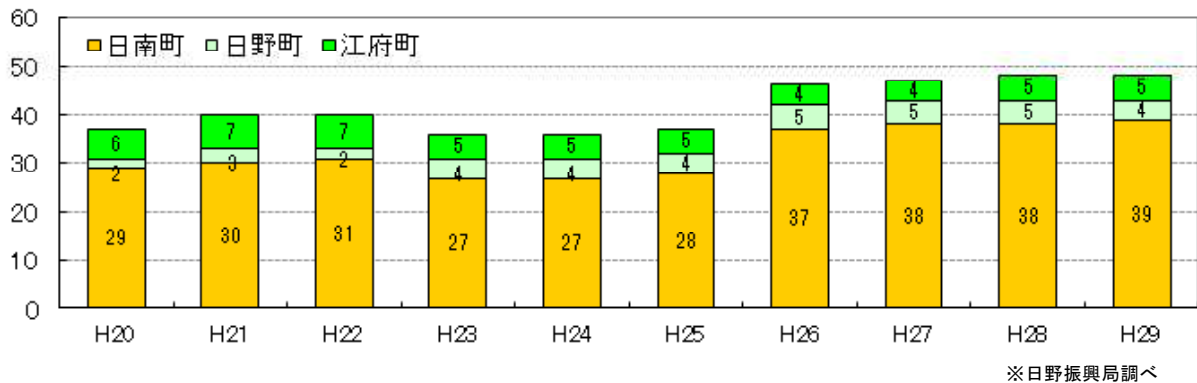
注1）農業就業人口とは、自営農業従事者のうち、農業が主である者（兼業で農業が主である者も含む）をいう

注2）基幹的農業従事者数とは、農業就業人口のうち、ふだん仕事として農業に従事している者をいう

(2)担い手の状況

認定農業者数の推移

○認定農業者数は、高齢化等による再認定見送りと新規認定の差が小さく、ここ数年は横ばいである。



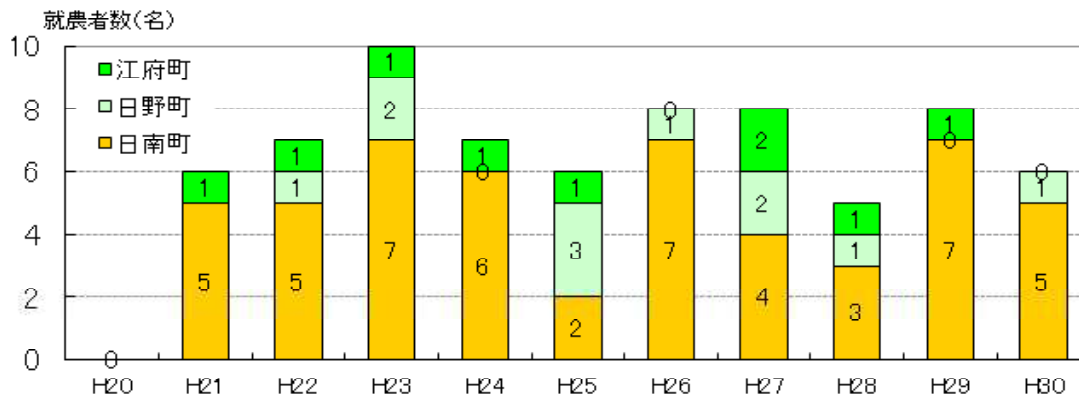
○郡内の組織経営体数は少ないが、近年は高齢化による労力不足対策として法人化の動きが進んでいる。

農業経営体数

区分	農業経営体数	うち法人数	
		集落営農法人数	
日南町	711	20	10
日野町	260	3	2
江府町	424	3	2

出展：農林業センサス（2015）及び日野振興局調べ

新規就農者数の推移



※日野振興局取りまとめ
※各年の1月1日から12月31日の間に就農した者が対象

○平成30年新規就農者数は日南町が5名（うち法人等就農者3名）、日野町1名、江府町0名の計6名。

○平成29年新規就農者数は日南町が7名（うち法人等就業者6名）、日野町0名、江府町1名（うち法人就農者1名）の計8名。

○近年新規就農者（独立、雇用）は日南町に多い傾向。独立就農では夏秋トマトが中心であり、ほかに白ねぎがある。

【参考】

○日南町においては、平成21年度から地域振興公社（平成25年4月1日から「一般財団法人エナジーにちなん」へ解散再設立）が主体となり2年間の農業研修制度を開始。

平成21年度：8名研修 ⇒うち7名が平成23年度から就農。

平成22年度：4名研修 ⇒うち1名が平成24年度から就農。

平成23年度：1名研修

平成24年度：3名研修 ⇒うち1名が平成26年度から就農。

平成25年度：3名研修 ⇒うち2名が平成27年度から就農。

平成26年度：3名研修

平成27年度：4名研修 ⇒うち1名が平成29年度から就農。

平成28年度：3名研修 ⇒うち1名が平成29年度から就農。

平成29年度：3名研修 ⇒うち2名が平成30年度から就農。

平成30年度：3名研修 ⇒うち1名が平成31年度から就農予定。

人・農地プラン

- 各町では、人農地問題解決推進チームを設置（メンバー：町・農業委員会・JA・機構・普及所・農業振興室等）し、1～2か月に1回程度、定期的な打ち合わせを行っている。担い手の規模拡大や縮小に伴う農地調整、集落や町域を超えた参入にかかる集落の合意形成、基盤整備の取り組み等、地域の実情に応じて話し合いのテーマは多岐にわたる。

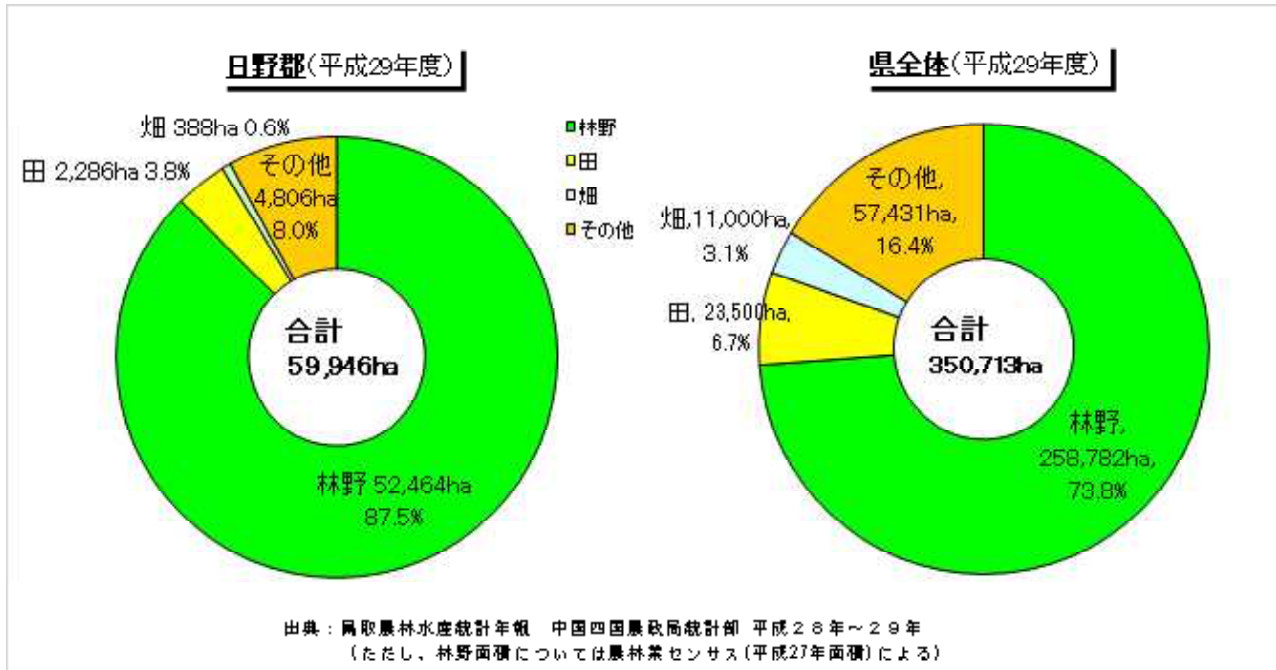
「人・農地プラン」作成状況

町名	プラン地域名	プラン数	中心となる経営体数
日南町	大宮地区、阿毘縁地区、山上地区、多里地区、日南地区	5	106 (うち法人20)
日野町	根雨地区、黒坂地区	2	17 (うち法人4)
江府町	江府町	1	4 (うち法人2)

※中心となる経営体：農地の受け手となる経営体。規模の大小は問わず、地域合意によりプランに位置づけられる。

(3)土地利用の状況

○林野率は87.5%と、県の73.8%に比べて高い。

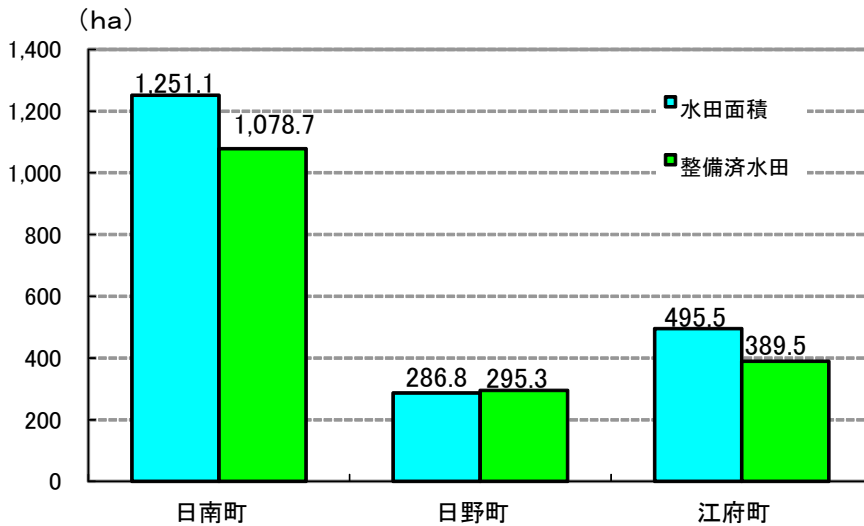


(4)農業基盤の整備状況

○日野郡内の農振農用地内整備済水田面積は1,763haで、整備率は86%となっている(県平均85%)。

○整備済水田面積は昨年とほぼ同じであり、水田整備率もほぼ横ばいである。

農振農用地の水田面積と基盤整備状況(平成28年度)



出典：平成28年ほ場整備率調査(農地・水保全課調べ)

※平成29年調査は集計中のため、平成28年調査値を掲載

(5)主な農畜産物の生産販売と取り組み

① 水稲

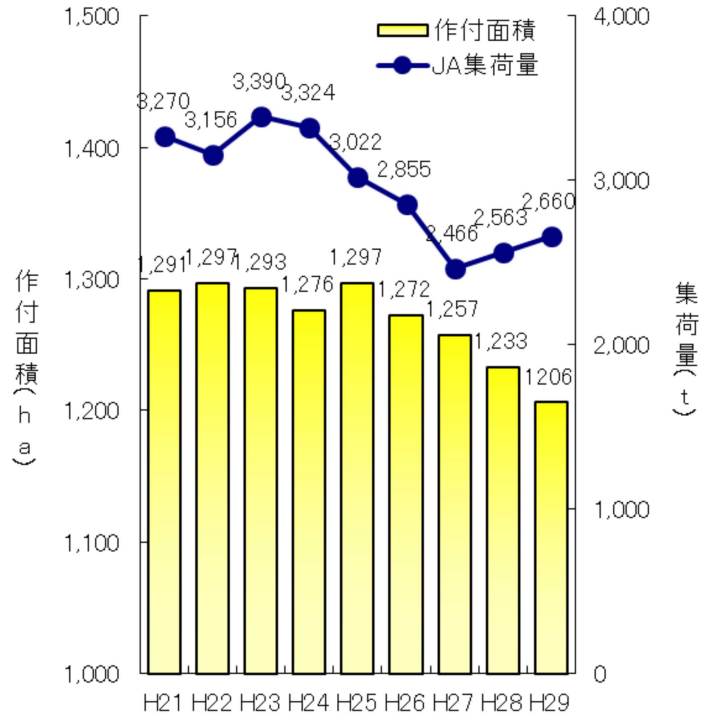
【栽培面積・集荷量】

○日野郡の水稲作付面積は、約1,300ha～1,200haであり、年々減少している。JAへの出荷量は、生産者による実需者への直接販売の取り組みの拡大等を背景として、減少傾向となっていたが、近年は若干の増加が見られる。

【生育状況・作況】

○平成29年産は、作柄が良かった前年産に比べると、10a当たりの収量は若干減少したものの、田植期以降の天候が良好であり、穂数の確保が出来たことから、県西部地区の作況指数（平年作100）は101となった（鳥取県101、全国100）。

水稲の作付面積とJA集荷量の推移

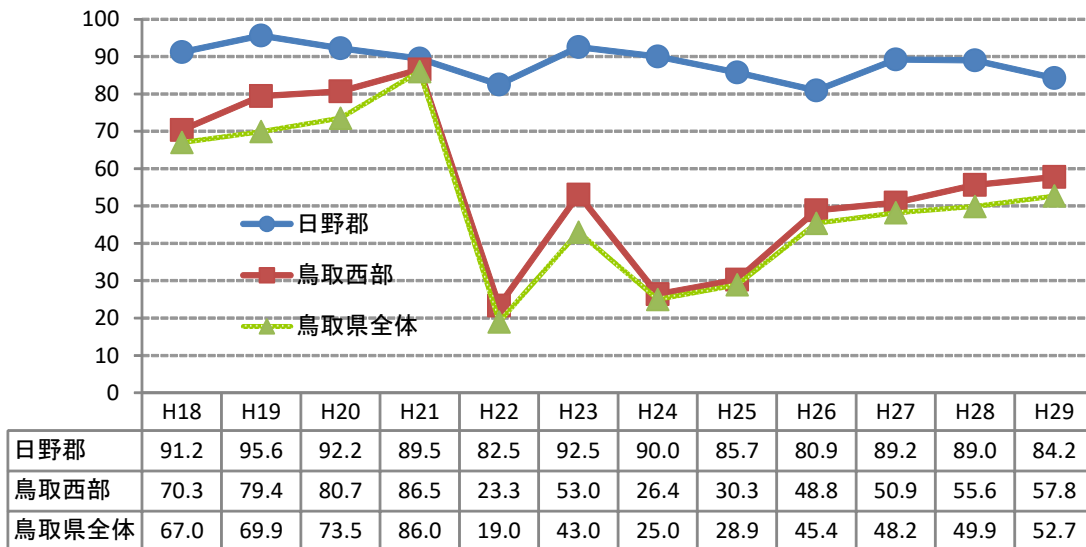


出典：集荷量は平成30年度日野郡産米改良協会資料、作付面積は鳥取県農業再生協議会総会（平成29年12月）資料

【1等米比率】

○平成29年産の1等米比率は、高温登熟により県全体の品質が低迷するなか、日南町85.1%、日野町89.5%、江府町80.7%と高い水準を維持している（県平均52.7%）。

一等米比率の推移(うるち米) (%)

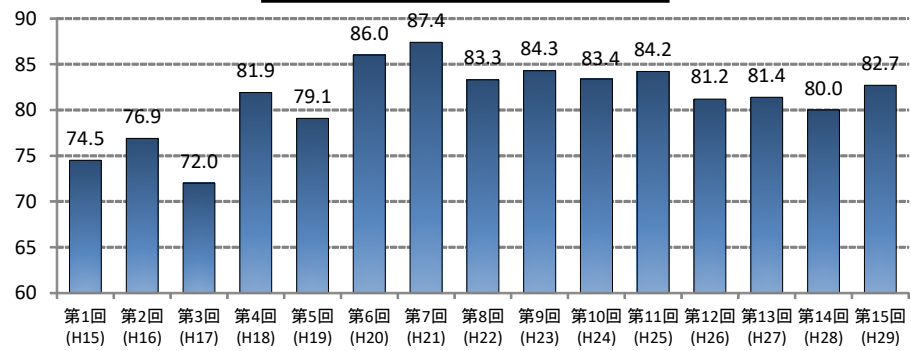


出展：農林水産省米穀の農産物検査結果（平成30年10月31日現在確定値）及び平成30年度日野郡産米改良協会資料

【食味値向上の取り組み】

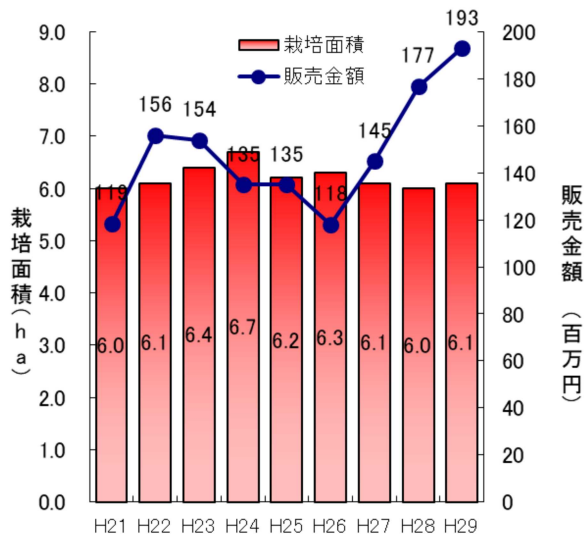
- 日野郡の特徴である「おいしいお米」をさらにレベルアップさせるため、平成15年から日野川源流米コンテストを開催。
- 平成20年以降は良食味米の生産技術が定着してきており、コンテストにおける平均食味値は、おいしいとされる80以上である。

日野川源流米コンテスト平均食味値



※日野振興局調べ

トマトの栽培面積と販売額の推移



出典：JA鳥取西部資料（平成30年度）

② トマト

【栽培面積・販売額】

- 平成29年度の栽培面積は、日南町5.6ha、江府町0.5haである。高齢化に伴う規模縮小の影響はあるものの、平成23年度以降、新規就農者の参入によって、栽培面積を維持している。
- 平成27年から日南町で新品种「りんか409」の導入が進み、収量・販売金額が大きく向上している。

【産地の取り組み】

- 日南町では、平成23年度に選果場が再整備（色彩選別機導入）された。
- また、平成26年度には日南町が「旨い果菜の里づくりプラン」を策定し、産地の維持・振興に取り組んでいる。

③ 白ねぎ

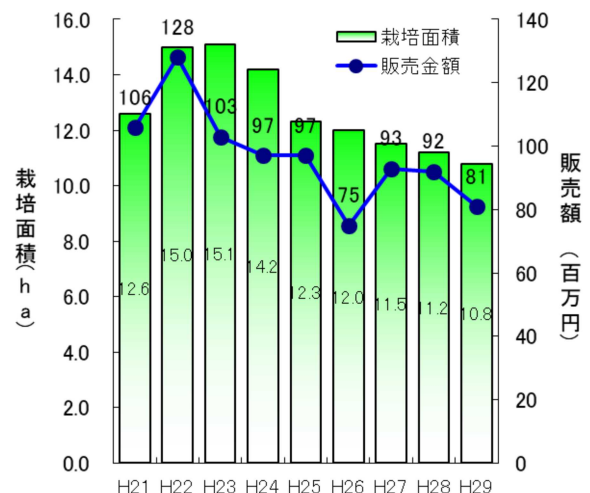
【栽培面積・販売額】

- 平成29年度の栽培面積は、日南町6.1ha、日野町1.5ha、江府町3.2haである。
- 販売額は、高齢化による栽培面積の減少の影響、病害の発生等により、平成23年度以降、減少している。

【産地の取り組み】

- 平成24年度、JA鳥取西部中心に白ねぎを振興するプラン「二大特産野菜の産地力増強プラン」が作成され、平成29年度までの5年間、生産者の確保や栽培面積拡大に取り組まれた。

白ねぎの栽培面積と販売額の推移

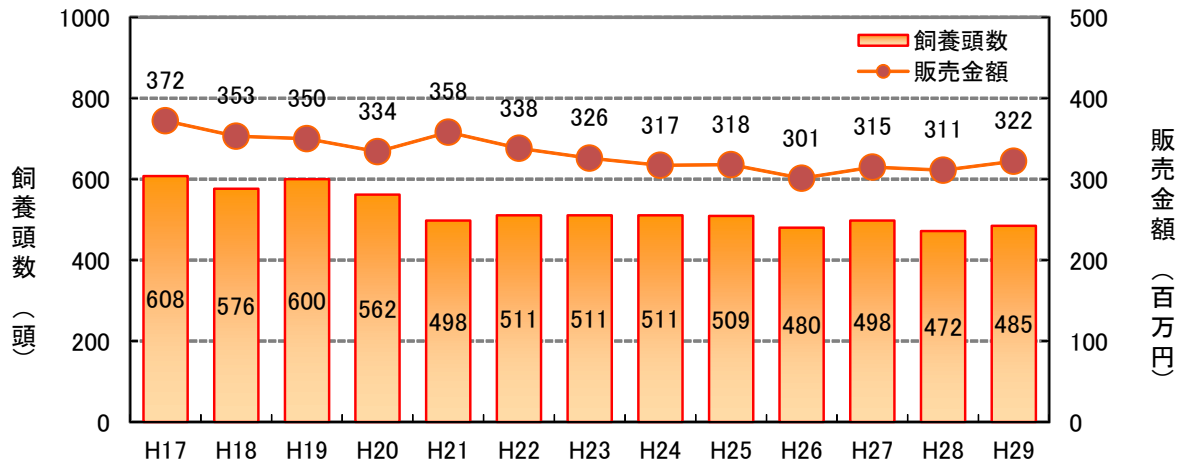


出典：JA鳥取西部資料（平成30年度）

④ 乳用牛（牛乳）

- 生乳は、平成17年から全国的に生産過剰基調となり、平成18年、19年と生乳の減産となる生産調整が実施され、日野郡内の飼養頭数は減少した。平成20年に入って生産調整は解除されたが、現在も回復には至っていない。
- 日野郡内には、100頭規模の大型農家が3戸あり、いずれも経営者は地域の中核的存在として健闘中である。

乳用牛（牛乳）の年次推移

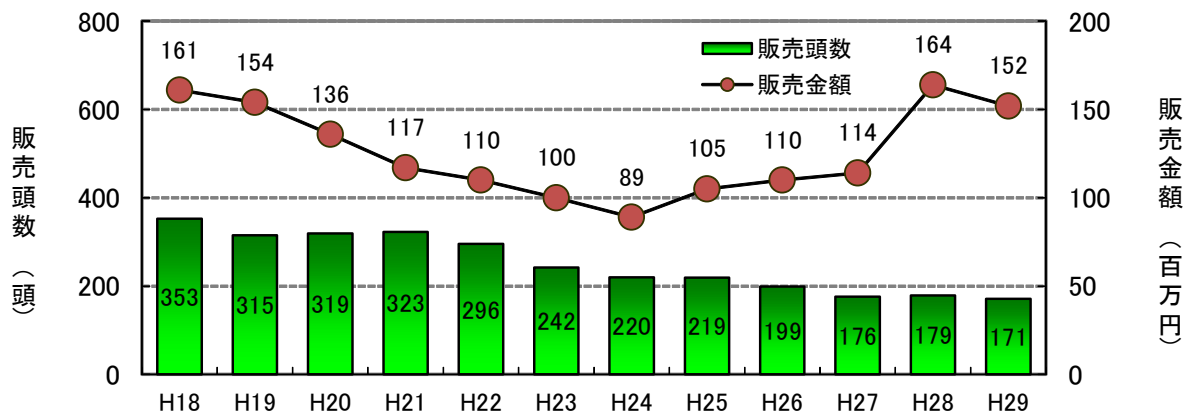


※大山乳業聞き取り

⑤ 和牛子牛

- 日野郡内では、平成13年から取り組んだ優良雌牛導入事業の成果により牛群改良が進み、さらに平成19年に全国和牛能力共進会が県内で開催された影響もあって、子牛の販売単価は高値で推移。
- その後、景気の後退を反映して販売単価が低下した時期もあったが、宮崎県の口蹄疫、東日本大震災の影響による全国的な素牛不足から、平成22年以降は、引き続き、高値での取引が続いている。
- 日野郡内の肉用牛経営は、和牛繁殖が主体であり、高齢化によって子牛の販売頭数が年々減少しているが、「白鵬85の3」、「百合白清2」という全国に誇れる県有種雄牛の誕生により、本県の子牛の価格は高騰しており、日本有数の高値での取引となっている。

和牛子牛の年次推移



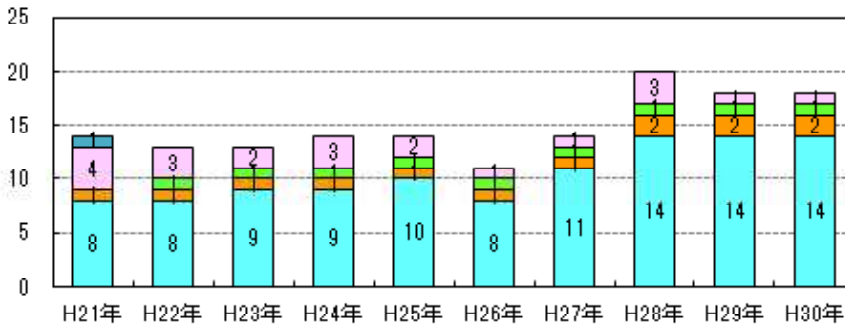
※JA鳥取西部聞き取り

(6) 環境に優しい農業の取り組み状況

① 特別栽培農産物登録

- 鳥取県特別栽培農産物登録件数は平成28年に増加した以降、横ばいで推移している。
- 品目別面積は水稲、ソバの順に多い。合計栽培面積は、近年微増傾向にある。

特別栽培登録件数

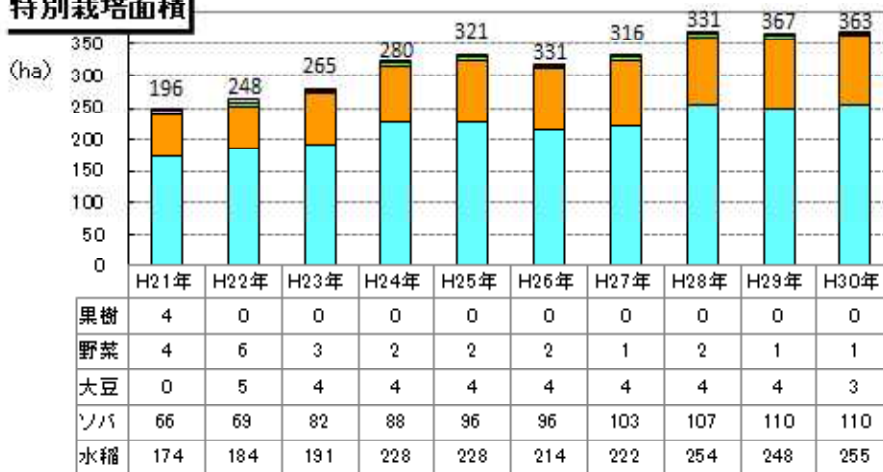


注1) 特別栽培農産物とは、農林水産省が定めた「特別栽培農産物に係る表示ガイドライン」に従って生産された、化学合成農薬及び化学肥料の窒素成分を慣行レベルの5割以上削減して生産した農産物をいう。

※平成31年2月末日野振興局調べ

特別栽培面積

(棒グラフ上の数値は、合計面積)

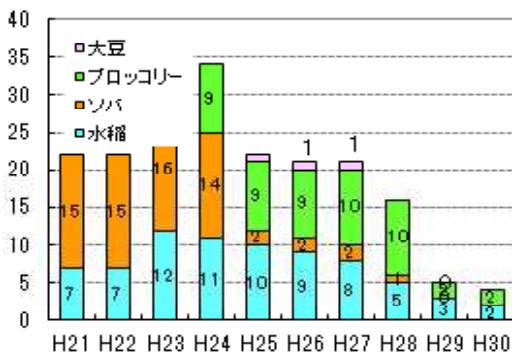


※平成31年2月末日野振興局調べ

② 持続性の高い農業生産方式に関する計画

- 平成24年をピークに徐々に減少している。

エコファーマー認定数

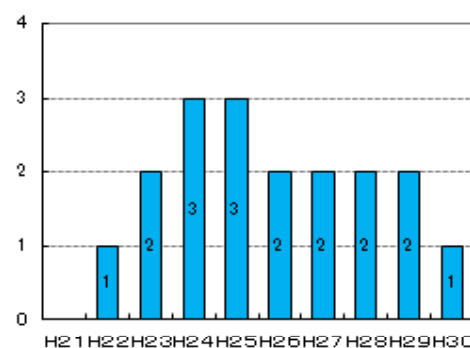


※日野振興局調べ(12月末延べ数)

③ 有機JAS認定

- 平成30年の認定状況は1名となっている。

有機JAS認定数



※日野振興局調べ(12月末調べ)

注) エコファーマーとは、持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律施行規則(平成11年農林水産省令第69号)に基づき、計画認定を受けた農業者をいう。

(7) 鳥獣被害と対策

①被害額

○日野郡内の野生鳥獣による農林業被害は、イノシシによる被害（水稲の踏み倒し、食害等）が大半を占めている。

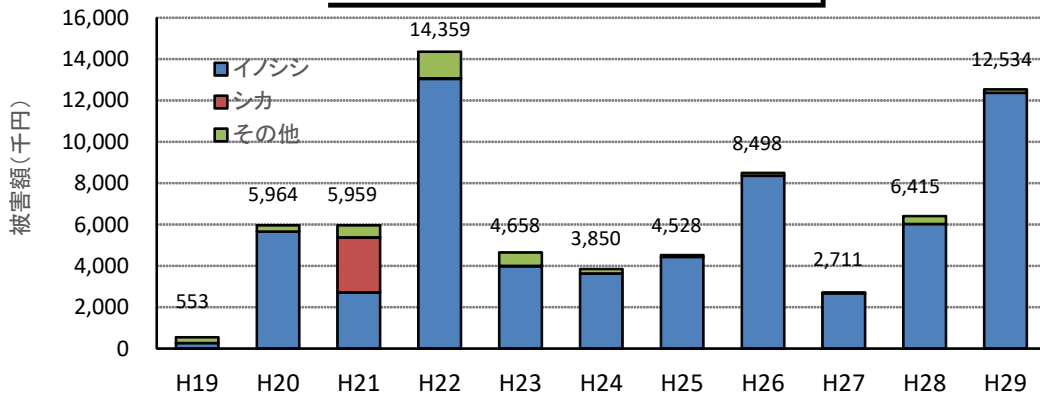
○被害額は平成22年度に14百万円と最大になり、以降は2百万円から9百万円の間で推移していたが、平成29年度は侵入防止柵が未整備の地域を中心に被害が発生し、過去11年間で2番目に高い被害額となった。

(単位: 千円)

年度	H27	H28	H29
イノシシ	2,680	6,026	12,377
シカ	0	0	0
カラス	0	0	0
サギ	0	0	0
サル	18	42	68
その他	13	347	89

※日野振興局調査

野生鳥獣による農林業被害額の推移



※日野振興局調査

②有害捕獲許可による捕獲数

○イノシシの捕獲頭数は、平成19年度以降、増加傾向にあり、近年は300頭～500頭で推移している。

○ニホンジカの捕獲頭数は、平成25年度以降、年々増加し続けており、平成29年度における捕獲頭数は過去最多の38頭となった。

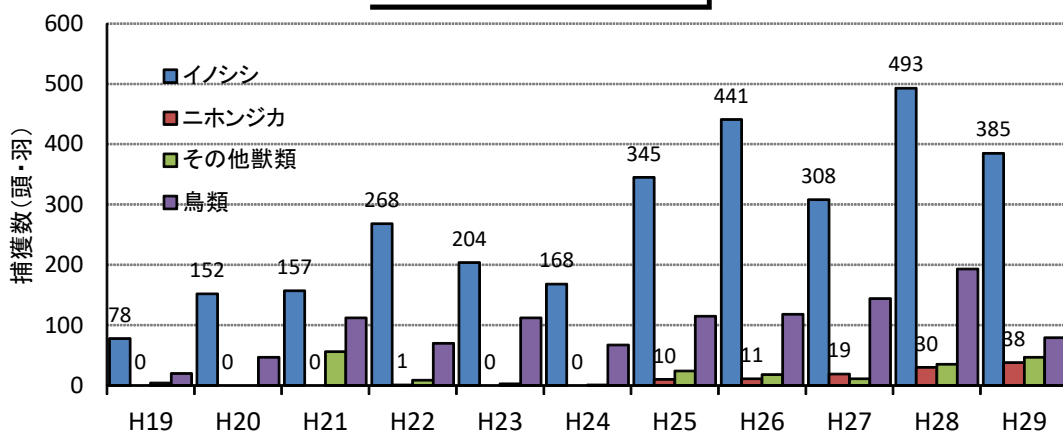
○その他の獣種としては、アナグマ、タヌキの捕獲頭数が年々増加している。

(単位: 頭、羽)

年度	H27	H28	H29
イノシシ	308	493	385
ニホンジカ	19	30	38
その他獣類	ヌートリア	2	2
	アナグマ	5	20
	タヌキ	4	13
鳥類	カラス	91	158
	サギ	30	14
	カワウ	23	21

※日野振興局調査

有害鳥獣捕獲数の推移



注) ヌートリアの捕獲は、ヌートリア・アライグマ防除実施計画による捕獲

※日野振興局調査